

第 24 号
2022. 3

カウンセラー
吉澤 克彦

こころ



菜根譚 ～滋孝友恭～

卒業、進級を前にした皆さんと保護者の皆様に、今回は、『菜根譚』を紹介します。

『菜根譚』（さいこんたん）は、400年ほど前に中国の明時代（日本は江戸時代初期）に洪自誠（こうじせい）がまとめた書物です。前集・後集の2部からなり、中国に古くから伝わる儒教、道教、仏教などの教えを260程度選んだ短い話の集まりです。

「菜根」とは、植物の根から転じて粗食の意。宋代の儒学者、汪革（おうかく）の「人、常に菜根を咬（か）み得は～」に依り、「慎み深い生活をする事で、心はやすらかで落ち着く」が大意。「譚」は、話、物語ということ。

『菜根譚』は、コロナ禍の中、困難な生きにくい時代に「どう生きてらいいのか」を問いかける書物として、今また新たな読者を獲得しています。

この『菜根譚』は、中・高生の皆さんは少しなじみがありますね。そう、ダンス部が全日本ダンスフェスティバルのために創作したダンスのタイトル（テーマ）でした。学校で披露したダンスを見せてもらいましたが、苦しみの先にある一点の希望の光を見る力強さがあり、とても素敵で今でも心に残っています。

さて、表題に『菜根譚』の中から引用した「**滋孝友恭**」という詞を挙げました。これは、前集の134番にある「父慈子孝、兄友弟恭。縦做倒極処、俱是合当如此。着不得一毫感激的念頭。如施者任德、受者懷恩、便是路人、便成市道矣。」からの4文字です。

「父（母）は子を**慈しみ**、子は親（父母）に**孝行する**。兄（姉）は弟（妹）を**友愛し**、弟（妹）は兄（姉）を**恭（敬愛）する**。」（現代風に、母、姉妹、を訳に加えました）という意味です。それに続く漢文は、少し、ハッ！とさせられます。「それは当たり前のこと、家族は愛が基盤で、**滋孝友恭**は無意識に行うもので、貸借、損得などはない。感謝するというのも他人行儀。」（かなり意識ですが）と。

これは無償の愛を説いているのだと思います。

新しいステージに立つ皆さんやそれを送り出す家族は、それぞれの思いがあるでしょう。よく感謝する、お礼の気持ちを表す、という言葉が聞きますが、家族（親密な間柄）は、感謝し合う関係というより、その間柄には無償の愛があるだけと説く『菜根譚』の一節は、考えさせられます。「感謝」「お礼の気持ち」は、他人行儀だという。

親からいただいている愛は、もっと大きく、親へ抱く心も、「感謝」や「お礼の気持ち」の中に潜む **give and take**、もちつもたれつ的なものではないのかも知れません。

もっとも「感謝」という熟語は古い文献にはなく、明治以降の造語ですが。

『菜根譚』には、「種をまけば必ずいつか実る」「他人の言葉を気にしすぎない」などの格言名言もあります。迷ったとき、立ち止まって手に取ってみてください。